

【一般口演8】 第26席

隋唐期医学書における「少気」概念について

京都 東郷 俊宏

中国医学書に記載された病證、病理について理解する際には、そこで用いられている用語の意義をその用例検討から確定していくことが必須の条件となるが、それと同時に用語の背景にある身体観を文化史の上で確認していくことも重要な課題となろう。

何故なら医学書において、疾病のあり方を何らかの因果関係によって説明する場合であれ、原因を示さず複数の自覚症状や徴候の羅列によって記述する場合であれ、「何を原因として想定した」か、あるいは「どこまでの範囲の症状、徴候を特定の症候群に含まれるものとして想定する」か、はその医学書が書かれた社会なり文化における身体観に大きく依拠するものと考えられるからである。

我々に身近な例を挙げれば、肩こりについて局所的な筋肉の緊張にその原因をもとめる立場と、飲食不節やストレスなどの「内傷」に原因を求め、これによって引き起こされる様々な症候のひとつとして肩こりを捉える立場とがあり得るが、この両者では「肩こり」という言葉を支えるリアリティーに著しい相違があり、かかる身体観の相違は当然の結果として治療法や臨床研究の方法論にも大きく影響する。あるいは肩こりという身体上の経験そのものを変えるかもしれないのである。

医学書における記述の背景にある身体観を探り出すことは決して容易ではなく、ともすれば独断に陥る危険性をはらむものの、我々が病について考える際に無意識のうちに前提としている身体観を明らかにする上でも重要な作業であると考えられる。

本口演においては、隋唐期の医学書、とりわけ『千金方』中の「少気」概念の用語検討を通じて、同概念がいかなる身体観を背景に記載されているか、若干の考察を試みたい。